

文学博士日野開三郎君の「唐代邸店の研究」 「続唐代邸店の研究」に対する授賞審査要旨

本書は唐代商業の発展に重要な役割を勤めた「邸」と「店」との研究で、兼ねて唐代都市の発達にも言及した著者三十年間の努力の結晶である。「邸」（または「邸舎」）とは本来卸売を営む問屋であって倉庫業をも兼ね、傍ら旅館業・飲食業等をも営んだものであり、「店」（または「肆舗」）は初め商品を陳べて販売するだけがその職能であった。「邸」はその多角的経営の結果蓄積した資本の力に依って水陸の運輸業を殆ど独占し、また金融業・為替業にも進出し、「飛銭」とか「便換」と称された手形を発行して遠隔地間の取引に便益を与え、「肆舗」も邸舎の繁栄と相寄り相待って嘗て見ないほどの商業の隆盛を促進した。交通の面だけを取上げても、船舶の賃貸、車輛の調達と修繕、民間唯一の交通機関たる驢の供給等、一に彼等の経営に待つ所が多かった。この趨勢は商人の間に富豪を多く発生せしめたが、彼等は富の力を以て独特の地位を確立し、中には従来の権力階級に対抗して一步も譲らぬ気概を示したのも少くなかった。著者はそれらの事実を一々指摘すると共に、更に進んで彼等の間にベルシャ人等の外商の多かった事実をも注意している。そもそも六朝時代から貨殖に巧みなソグディアナ人などが既に漠北の遊牧民の間に来て、その財力を以て重きをなし、また後にして蒙古時代に西土より東来して、財界に君臨した有力者の少くなかったことは、夙に内外学者の留意する所となつて、その研究も相当に発表されているが、唐代にもおなじような事実の

多く見られることを、著者が克明に例証したのは、この方面の研究に寄与する所まことに大なるものがあるといわねばならない。

著者は更に地方都邑の發達に眼を転じ、その邸舎・店肆も時と共に繁盛に赴き、諸種の理由に依る人口の増殖に伴い、城門外や城壁の周圍に溢出した部分が在来の城内の居民と相合し到る所に小都會を現出したが、新興市街の需要に應ずるため「草市」なるものの發生を見、これを中心として殷賑な商店街の興隆を目にするに及んだ。「草市」の義に就いては従来諸説があつたが、これは家畜の飼料たる秣を売買する所ではなく、我が国にも「草野球」・「草競馬」・「草相撲」の用例があるように、「正式な」法令に依つて設けられた「市場ではなく、自然發生的な、準市場であることを強調して旧説を一掃した。かくて所在に中小都市の興るのを見たが、就中汴・宋・蘇・杭・越・洪・広の諸州や四川の成都府などはいずれも人口四五十万を数える都會と見られるが、長安・洛陽・揚州・荊州（江陵）の如きは各種のデータから推定して百万以上の住民を擁した大都會と考えられ、地方都市が前代にたく増加し膨脹したことを論述し、関連事項にも説き及んだことは亦本書の一特色である。

願うに唐代邸店の研究及び都市の發達史的攻究は、五代五十余年の過渡期を経、中国社会に近代的様相の芽ぐみ始めた宋代に花開き、一新時代を迎えるに至つた重要な時期の肝要な問題である。唐代の經濟史に造詣の深かつた故加藤繁博士には早く邸店の研究があり、前人未拓の野に始めて鋤を下された功は、世人の普く認める所であるが、なお未解決のままに残された問題も数多く、資料の一層の充実も期待されたことであつた。著者は自ら進んでこの要望に副わんと志し、新・旧の両「唐書」・「通典」・「唐會要」・「資治通鑑」・「冊府元龜」の類を限なく檢索したのは勿論、

「全唐文」・「全唐詩」の類を縦横に駆使し、なお遺漏なきやを「文苑英華」・「唐大詔令集」等に徴し、就中最も多とすべきは「太平広記」五百巻を単に渉獵するに止らず、恐らくは巻首より巻尾まで全書を読破し、そこに引用された三百四十余部の古書・佚書を活用して資料に供したことなどは、遽かに余人に求め易からぬ所である。